

古英語の音変化に関する一考察（2・完） A study of Old English sound change (2)

森 基雄
Motoo MORI

要旨

前回（1）の森（2020）では、Campbell（1959：109）が古英語の強勢母音の音変化についての論考の最後の箇所まで10項目として挙げたものについて、その実例を示しながら詳細に論じたが、今回（2・完）では主にそれらの音変化の生起順序についてその判断材料となる根拠を挙げて論じていくことにする。

Campbell が自身の見解による生起順序に沿って挙げた音変化の10項目をここに改めて示す。1. 鼻音の前での WGmc *a*, *ā* の鼻音化、そして鼻音の前以外での WGmc *ā* から *æ/ē* へのアングロ・フリジア語（Anglo-Frisian）における発達；2. WGmc *ai* > *ā*；3. WGmc *a* の *æ* への前舌化；4. 割れ（breaking）とそれに関連した後退（retraction）；5. 後母音の前での *æ*, *æ* > *a*, *ā* の復元（restoration）；6. 第2の前舌化（主にマーシア方言の Vespasian Psalter）。前母音の硬口蓋二重母音化（palatal diphthongization）と後母音の早期の硬口蓋二重母音化（主にウェストサクソン方言とノーサンブリア方言において）；7. i-ウムラウト（i-mutation）；8. 後舌ウムラウト（back mutation）；9. 滑化（smoothing）；10. 母音縮約と代償的長音化。なお必要に応じ、これらの10項目以外の音変化についても取り上げていきたい。

キーワード：アングロ・フリジア明音化、割れ、後退、復元、硬口蓋二重母音化、i-ウムラウト、第2の前舌化、滑化

1. 鼻音の前での WGmc *ā* の鼻音化、鼻音の前以外での WGmc *ā* から *æ/ē* へのアングロ・フリジア語における発達、WGmc *ai* > *ā*

WGmc *ā* が鼻音の前で鼻音化されていた場合、*æ/ē* とはならず OE *nōmon* ‘they took’ (OS, OHG *nāmun*)、OE *mōna* ‘moon’ (OS, OHG *māno*) のように徹底して *ō* となっていたことから、この鼻音化が *æ/ē* への発達に先立って起こっていたことは明らかである。

また WGmc *ā* > *æ/ē* は WGmc *ai* > *ā* に先立って起こっていたはずである。Campbell（1959：52）は、もし逆の順序であったなら、WGmc *ai* に由来する *ā* も WGmc *ā* とともに *æ/ē*、すなわち WS *æ*、Angl *ē* となっていたはずであるとしている。例えば ‘oath’ の古英語形は実在形 *āþ* (OHG *eid*, Go *áips*) ではなく ***æþ*、***ēþ* となってしまうことになる。

そして WGmc *ā* > *æ/ē* のさらに詳細なプロセスとしては次の2つが考えられるのではないだろうか。すなわち WGmc *ā* が POE *æ* となり、そしてこの POE *æ* が WS *æ* と Angl *ē* に分裂したのか、あるいは WGmc *ā* が POE *æ* という中間段階なしに直接 WS *æ* と Angl *ē* に分裂したのかということである。

この2つの見方のうち、前者の可能性を示すと思われる例として特に Fulk (1998: 141, 145) が注目しているのが (WGmc *blāan>) Nbr blāwa ‘to blow’ (WS blāwan, OHG blāen)、(WGmc *sāan>) Nbr sāwa ‘to sow’ (WS sāwan, OS sājan, OHG sāhen, sāwen) である。これは POE æ が Angl ē となる前に後続の w の影響で ā に後退した結果であったと考えられるのであり、WGmc ā が POE æ という中間段階なしに直接 Angl ē となっていた、あるいは POE æ を経て Angl ē となった後で後続の w の影響で ā に後退した結果であったとは考えにくい。これは結果としては同じく æ の ā への逆戻りであっても冒頭の Campbell によるリストの 5. に含まれる後記 3. のウェストサクソン方言における後母音の前での ā の復元 (restoration) よりも早期のものであったと考えられる。上記のような例について Ringe & Taylor (2014: 149) は古英語ではそもそも WGmc ā は高位前舌母音 i が後続していなかった w の前で æ への前舌化と ā への後退を経ずにそのまま維持された結果であるとしているが、本稿では POE æ という中間段階があったとする解釈に従うことにする。

他方、Ringe & Taylor (2014: 150) によれば、逆に高位前舌母音 i が後続していた w の前に WGmc ā が位置していた WS *æltæwi>æltæwe ‘complete, perfect’ (Go tafhuntēweis ‘decimal’) と WGmc *lāwjan (*lāwjan ではなく *lāwijan というこの Ringe & Taylor による表記は j の前に Sievers の法則により生じた i が保持されていた段階を反映したものである)>WS lāwan ‘to betray’ (Nbr belēwa, OHG gilāen, Go lēwjan) における æ は WGmc ā の POE æ への前舌化という最も一般的な音変化によるものであり、従って i-ウムラウトとは無関係であることになる。すなわち WGmc āw においてたとえこの w に高位前舌母音 i が後続していた場合でも ā は前舌化されずに維持されたのち i-ウムラウトを受けたのではなく、また Campbell (1959: 77) が考える、WGmc ā の前舌化による POE æ がこの w の影響で ā に後退した後で i-ウムラウトを受けた結果でもないことになる。そして lāwan のノーサンブリア方言形 belēwa はそのことを裏付ける証拠となるのではないだろうか。もしノーサンブリア方言形が ā の i-ウムラウトを経ていたのであれば、それは belēwa ではなく **belæwa となっていたはずである。

また WGmc ā の鼻音化が WGmc ai>ā に先立って起こっていたことは明らかであろう。もし逆の順序であったなら、鼻音の前の WGmc ai も ā となったのちに ā を経て ǫ となってしまうであろう。例えば WGmc *haim ‘home’ (OHG heim, Go háims)、WGmc *stain ‘stone’ (OHG stein, Go stáins) は古英語では実在形 hām, stān とはならず、**hām, **stān を経て **hōm, **stōn となってしまうことになる。

2. WGmc a の鼻音化、WGmc ai>ā、WGmc a の æ への前舌化 (AFB)

WGmc a は鼻音の前で鼻音化されていた場合、WGmc a の æ への前舌化、すなわちアングロ・フリジア明音化 (Anglo-Frisian Brightening, AFB) による前舌化は受けていないことから、WGmc a の鼻音化が AFB に先立って起こっていたことは明らかである。また WGmc ai>ā と AFB との関係については Campbell (1959: 52)、Hogg (1992: 79) は WGmc ai>ā、AFB の順序で起こったのであり、もし逆の順序であったなら ai は æi となってしまう、さらにこの æi が ā になったとは考えにくいとしている。例えば ‘oath’ は WGmc *aiþ>*æiþ>OE āþ ではなく、あくまでも WGmc *aiþ>OE āþ という音過程の結果であったということになる。さらに Hogg (1992: 79) は WGmc ai が AFB を受けて æi となっていたならば、それは ā (āþ) ではなく æ (**æþ) となっていたのではないかとしている。他方、Ringe & Taylor (2014: 155, 171) は WGmc ai>ā と AFB との順序関係については問題視せず、そもそも AFB が WGmc ai の第1要素 a に影響を及ぼし得るという前提には立たず、WGmc ai の動向と AFB とはまったく無関係なものとしてとらえており、この両変化の順序関係については不問に付している。

3. 割れと後母音の前での æ 、 ǣ > a 、 ā の復元

両者の順序関係を探るに当たり、まず Campbell (1959: 56, 61)、Hogg (1992: 81, 99)、Ringe & Taylor (2014: 189-190) は AFB による $\text{æ} + \text{h}$ + 後母音という音結合がのちに æ の後母音の前での a への復元ではなく æ の割れを反映する結果を示していることに着目し、その例として *slēan* ‘to strike, to kill’、*ēa* ‘river’ を挙げている。*slēan* は WGmc **slahan* (OS, OHG *slahan*) > (AFB) **slæhan* > (割れ) **sleahan* > (h の消失、母音縮約、代償的長音化) > *slēan* という音過程の結果であり、後母音の前での a の復元は経ていないことがわかるのであり、これは割れ、復元という順序を明確に示すものと言えるであろう。もし割れに先立って復元を受けていたならば、**slæhan* > (復元) **slahan* (h の消失、母音縮約、代償的長音化) > ***slān* となっていたはずである。

他方、ノーサンブリア方言形には **slæhan* の段階で割れに先立って復元を受けたことを思わせる *slā* という例もある。しかしこの場合は Campbell (1959: 56) が主張するように、強変化動詞 6 類の他のもので語根末子音が h ではなく割れとは無関係な例えば *faran* ‘to go’、*dragan* ‘to draw’ のような復元のみを示す形の影響により、割れに先立つ中間段階で類推的に **slahan* という形に変えられていた結果かもしれない。

そして割れ、復元という順序を明確に示すさらなる例として挙げてよいのが WS、Angl *ēa* ‘river’ (OS, OHG *aha*, Go *alva*) であり、これは **ah*ō > **ahu* > (AFB) **æhu* > (割れ) **eahu* (> (滑化) Angl **æhu*) > (h の消失、母音縮約、代償的長音化) *ēa* という音過程の結果である。

また割れと復元が起こる本来の条件に一見矛盾しているかのような例として語根末子音が流音 r、l である中性 wa-語幹名詞 *searu* ‘device, tool, weapon’ (OHG *saro* ‘device, tool, weapon’、Go *sarwa* ‘armor’ (複数))、*bealu* ‘harm, evil’ (OS *balu*、OHG *balo* ‘harm, evil’、Go *balwawēsei* ‘wickedness’) に注目してみたい。この 2 者の主格対格単数のゲルマン祖語形は **sarwan*、**balwan* であったが、これらは接辞の Gmc **-wan* が **-an* の消失により WGmc **-u* となったことによって AFB による語根母音 æ には *ea* への割れは起こらず、次音節の u の影響による a への復元により ***saru*、***balu* となるのが本来の発達であったはずである。そして主格対格複数のゲルマン祖語形は **sarwō*、**balwō* であったが、接辞の Gmc **-wō* が **-wu* となり、さらに w が u の前で消失して **-u* となることにより、主格対格単数と同じく ***saru*、***balu* となるのが本来の発達であったはずである。すなわち Campbell (1959: 232) が述べているように、***saru* ではなく *searu* となっているのは古英語の段階で接辞が w + 母音という状態を維持していたために割れを生じた *searw*-形 (属格単数 *searwes* と与格単数 *searwe*、属格複数 *searwa*) からの影響を受けたためである。与格複数 *searwum* もまた割れを示すが、これも本来の発達形ではなく均一化の結果である。すなわち与格複数はもともと **sarwum* であったはずであり、w は u の前で消失して ***sarum* となり、さらに AFB により ***særum*、そして復元により ***sarum* となるのが本来の発達であったはずである。すなわち w はいったん消失したものの均一化により再び導入された結果、(**særum* > **særwum*) *searwum* となったのである。同様のことは *bealu* についても言えるのであり、*ea* は古英語の段階で接辞が w + 母音という状態を維持していた *bealw*-形からの影響によるものである。

また復元は AFB による短母音 æ だけではなく長母音の (WGmc ā) WS ǣ にも起こった: WS *mæg* ‘kinsman’ (OS *māg*) の主格対格複数 *māgas* (OS *māgos*)。しかし ā への復元はウェストサクソン方言以外の方言では見られず、他の方言での対応形として確認できるのは WGmc ā のアングリア方言における最も普通の発達である ē を示す *mēg* とその主格対格複数 *mēgas* である。すなわち ā への復元の入力となったのは ē ではなくあくまでも æ であったため、 ā への復元は (WGmc ā) POE ǣ が ē への上げを受けずに維持されたウェストサクソン方言に限定されていたのであり、復元を示さない *mēgas* のような例を有するアングリア方言では (WGmc ā) POE ǣ の ē への上げが復元に先立って起こっていたと考えられる。

そして前記1. で取り上げた WS blāwan、Nbr blāwa ‘to blow’、WS sāwan、Nbr sāwa ‘to sow’ における語根母音 ā は w+後母音または非高位前舌母音の前で WGmc ā が POE æ への前舌化と ā への後退を経ずにそのまま維持された結果であったとする前記の Ringe & Taylor (2014: 151) の見方ではなく、(WGmc ā>) POE æ が後続の w の影響で ā に後退した結果であったとする見方を是とするならば、これは後続音の影響による同じく æ の ā への逆戻りではあっても POE æ の ē への上げに先立つ現象であったことになり、従って māgas に見られる ā への復元に先立つ現象であったことにもなる。

4. 復元と軟口蓋子音の硬口蓋化、後退と軟口蓋子音の硬口蓋化

Campbell は 10 項目の中には直接は挙げていないが、第2の前舌化、前母音の硬口蓋二重母音化、i-ウムラウトの順序関係を論じる上で欠かせないのが前母音の硬口蓋二重母音化の直接の前提ともなった軟口蓋子音の硬口蓋化 (palatalization) であり、まず a の復元と軟口蓋子音の硬口蓋化の順序関係について確認しておきたい。

森 (2019) では硬口蓋化については WGmc a の前舌化とともに古英語と古フリジア語の直接の祖語としてのアングロ・フリジア語の段階で起こった音変化としての考察を試みたが、本稿では Hogg、Campbell に従い、ブリテン島の古英語の段階で起こっていた音変化であったという前提で考えてみたい。

両者の生起順序についてであるが、(WGmc *[kalan]、*[galan]>) calan ‘to become cold’、galan ‘to sing’ を例にとると、これらは AFB によりいったんは *[kælan]、*[gælan] となったが、硬口蓋化が起こる前に æ が復元により a となったため、語頭子音は軟口蓋音のまま維持された、すなわち生起順序としては a の復元、硬口蓋化の順であったと考えられる。そして後退と硬口蓋化についても例えば WGmc *kald ‘cold’ (OS kald)>(AFB) *kæld>(後退) Angl cald のように語頭子音が軟口蓋音のまま維持されていることから、後退、硬口蓋化の順であったと考えられる。

5. u>o の a-ウムラウトと i-ウムラウト

前回の森 (2020) においても述べたように、u>o の a-ウムラウトが i-ウムラウトに先立って起こっていたことは、前者による結果音 o がのちに i-ウムラウトを受けたことを示す (*dohtri>) dœhter、dehter (dohtor ‘daughter’ の与格単数)；(*worpin>) Nbr āwærpen ‘thrown’ のような実例によって裏付けられる。

6. 硬口蓋化と i-ウムラウト

硬口蓋二重母音化と i-ウムラウトの順序関係を論じるに先立ち、硬口蓋化と i-ウムラウトの関係に着目しておきたい。語頭の WGmc *[k]、*[g] は、後続の後母音が i-ウムラウトを受けた結果音としての前母音の前では軟口蓋音のままであったことから、硬口蓋化は i-ウムラウトの終了後に起こったと考えられる。まずその最も明確な根拠となると思われるのが非円唇母音であった (WGmc ai>) ā の i-ウムラウトのケースであろう：*kaiju>*kāju>cæg ‘key’；*[gaigjan]>*[gāg’jan]>forgægan ‘abweichen’ (ON geiga ‘abschwenken’)；*[gaiti]>*[gāti]>gæt (gāt ‘goat’ (Go gáits) の主格複数)。

そしてそのさらなる根拠となると思われるのが同じく非円唇母音で AFB による æ が復元を受けた結果音 a の i-ウムラウトのケースである：*[gaduling]>(AFB) *[gæduling]>(復元) *[gaduling]>(i-ウムラウト) *[gædyling]>gædeling ‘companion’ (OS gaduling)；cælp ‘it gets cold’ (不定詞は calan)。その最古の段階の古英語形 *kalip は本来の発達を経ていたならば、まず AFB により *kælip、次に硬口蓋化により *k’ælip、そして i-ウムラウトなどにより **cēlep、あるいは硬口蓋二重母音化が加わって **cielp となっていたはずである。このことは cælp と同根語で本来

の発達を経た Gmc *kaliz > čele, čiele ‘cold(ness)’ という例からも明らかである。にもかかわらず cælp への i-ウムラウトの入力となる形が *kalip であったのは、AFB による æ を有していた本来形 *kælip が硬口蓋化よりも早期の段階で、復元による a を有していた不定詞や複数人称形などからの類推的な影響を受けたためである。

7. 硬口蓋二重母音化と i-ウムラウト

両者の順序関係を裏付けられると思われる例は WS *čiese > čyse ‘cheese’ のみである。これは L cāseus > WGmc *kāsī (OS, OHG kāsī) > (硬口蓋化) POE *cāsī > WS *cāsī > (硬口蓋二重母音化) *čāsī > (i-ウムラウト) *čiese > čyse という音過程の結果であると考えられる。逆に i-ウムラウト、硬口蓋二重母音化の順であったならば、i-ウムラウトはまず æ には働かず、æ が硬口蓋二重母音化のみを経た結果、WS *cāsī は **čēase となっていたはずである。なおウェストサクソン方言以外の方言では POE *cāsī は硬口蓋二重母音化と i-ウムラウトのいずれとも無関係であったため、æ の ē への上げのみの結果を反映する čēse となった。

従って同様に WS ġiest ‘guest’ (OS, OHG gast, Go gasts, PN -gastiR) は WGmc *[gasti] > (AFB) *[gæsti] > (硬口蓋化) *ġæsti > (i-ウムラウト) *ġesti > (硬口蓋二重母音化) ġiest ではなく、WGmc *[gasti] > (AFB) *[gæsti] > (硬口蓋化) *ġæsti > (硬口蓋二重母音化) *ġeasti > (i-ウムラウト) ġiest という音過程の結果であったと考えられる。同じことはさらに WS *cietel > čytel ‘kettle’ (Go katilē), WS scieppan ‘to make, to create’ (Go gaskapjan) についても言えるであろう。ただし sc の後では後母音の i-ウムラウトに由来する前母音の硬口蓋二重母音化が起こったケースとそうでないケースが少数ながら併存していた。

このように č, ġ, sc との接触により生じた綴り字 <ea, ie> の音価の解釈については意見が分かれており、それは2つに大別することができる。すなわち č, ġ, sc との接触により生じた綴り字 <ea, ie> はまさに硬口蓋二重母音化という音変化の結果であり、その音価は硬口蓋二重母音化以外の音変化に由来する ea, ēa, ie, iē のそれと完全に ea [æa], ēa [ǣa], ie [iy], iē [īy] として併合したとする見方と、そもそも硬口蓋二重母音化という音変化そのものが存在せず、この場合の綴り字 <ea, ie> の第1要素 e, i は先行子音 č, ġ, sc の硬口蓋性を示す綴り字に過ぎず、従って <ea, ie> の音価はこの二重母音的な綴り字となる前段階と変わらず <ea> の音価は [æ, ǣ], <ie> の音価は [e, ē] であったとする見方がある。前者は Campbell, Hogg 等を含む多数派意見であり、後者は Colman (1985), Lass (1994) 等を含む少数派意見である。

後者の意見に従うならば、(WGmc *[gab]) *[gæf] > <geaf> ‘(s)he gave’ は [jæaf] ではなく [jæf]、(WGmc *skāp) *scāp > <sceap> ‘sheep’ は scāp [ʃæp] ではなく [ʃæp], <giefan> ‘to give’ は [jiyvan] ではなく [jēvan], <giēt> ‘still, yet’ は giēt [jiyt] ではなく [jēt] ということになる。そして本来なら [jæf] は **<geaf>, [ʃæp] は **<sceap> と綴られるべきところが、<e>+二重文字 <æ> という表記は許されなかったのだという。

確かに先行の硬口蓋子音の影響による音変化は、後続音の影響により前母音の後位置にわたり音が生じた割れや後舌ウムラウトとは本来まったく異質であり、両者の結果が同じ綴り字であったからと言って両者が同じ音価として併合したとは考えにくいという見方は理解できるが、Hogg (1992: 107-108), Ringe & Taylor (2014: 217) が指摘するように、č, ġ, sc の後位置の前母音から発達した二重母音字の音価がのちに他の起源の二重母音のそれと併合していることから、硬口蓋二重母音化は綴り字上の変化にとどまらず正規の音変化だったのではないだろうか。このことはその二重母音字を有するケースの中でも例えば giefan > gyfan ‘to give’, *cietel > čytel ‘kettle’, *scieppan > scyððan ‘to harm’, giēt > ġyt ‘yet’ における <ie> が *falljan > *fælljan > *fealljan > *fiellan > fyllan ‘to make fall, to fell’, *hēarjan > hīeran > hýran ‘to hear’, *unhīori > unhiere > unhýre ‘horrible, deadly’ におけるような起源の異なる <ie> と併合して <y> となっていることからやはり明確に裏付けられるであろう。

8. i-ウムラウトと w の前での e の割れ

割れは一般に i-ウムラウトに先立って起こったという見方が正しいのであるが、w の前での e の割れは *cneowes* ‘knee’ (属格単数) (OS, OHG *knewes*) でのような WGmc e に由来する e にだけでなく、*ewe*、*eowe* ‘ewe’ (L *ovis* ‘sheep’、Go *awistr* ‘sheepfold’) のように AFB による æ の i-ウムラウトに由来する e にも起こっていることから、割れのこのケースだけは i-ウムラウト後に起こった、あるいは i-ウムラウト後も効力を継続していたと考えられる。

9. 割れと硬口蓋二重母音化

割れが硬口蓋化、そしてさらに硬口蓋二重母音化に先立つものであったことはここまでの論考からも明らかであるとされるが、両者のこの順序関係をさらに明確に裏付けられる例として、WS *ġeorn* ‘desirous, eager’ (OS, OHG *gern*)、WS *ċeorfan* ‘to carve, to cut’ (MHG *kerben*)、WGmc **skelh* (OHG *skelah*) > WS **sċeolh* ‘oblique’ (この形は弱変化斜格形 (**sċeolha*) > WS *sċeola*、Merc *sċeolhēgi* ‘squint-eyed’ の第 1 要素 *sċeolh-* などから裏付けられる)、そして AFB による æ の IC の前での割れに由来する ea を有する WS、Kt *ġealla* ‘gall’ (Angl *galla*、OS、OHG *galla*) を挙げるができるであろう。

もし硬口蓋二重母音化が割れに先立って起こっていたならば、‘desirous, eager’、‘to carve, to cut’、‘oblique’ はそれぞれ ***ġiern*、***ċierfan*、***sċielh* となっていたはずである。そしてケント方言ではウェストサクソン方言と同じく AFB による æ の IC の前での ea への割れは起こったが (WS、Kt *ealle* ‘all’、Angl *alle*、OS、OHG *alle* ; WS、Kt *healdan* ‘to hold’、Merc *haldan*、Nbr *halda*、OS *haldan*)、硬口蓋二重母音化は起こらなかったことから、*ġealla* の ea がケント方言ではもちろんウェストサクソン方言においてもまた硬口蓋二重母音化ではなく割れに由来するものであることは明らかである。従って ea が割れと硬口蓋二重母音化のいずれに由来するものなのかが一見紛らわしい WS *ċeald* ‘cold’ (Angl *cald*)、WS *ġealdor* ‘incantation’ (Merc *galdur-*、ON *galdr*)、WS *sċealc* ‘servant, retainer’ (OS、OHG *skalk*)、WS *ġeard* ‘enclosure’ (OS *gard* ‘field’)、**[karb]* > WS *ċearf* (*ċeorfan* ‘to carve, to cut’ の直説法過去単数 1、3 人称)、WS *sċearp* ‘sharp’ (OS *skarp*)、WS *ċeahhettan* ‘to laugh loudly’ (OHG *kahhazzen*) などにおける ea も明らかに硬口蓋二重母音化ではなく割れに由来するものである。

10. 復元、硬口蓋化、第 2 の前舌化、後舌ウムラウト

WGmc **[gatu]* ‘gates’ が AFB により **[gætu]*、そしてさらに *[g]* の硬口蓋化に先立つ *æ* > *a* の復元と *[g]* の閉鎖音化により *gatu* となったのがウェストサクソン方言であったのに対し、マーシア方言の特に *Vespasian Psalter* ではそこへ第 2 の前舌化が加わり **gætu*、そしてさらに後舌ウムラウトが加わった結果 *geatu* となったと考えられる。すなわち復元による後母音 a に先行する語頭の *[g]* は硬口蓋化とそれに続く *[j]* への変化を受けることはなかったため、ウェストサクソン方言と同様マーシア方言でも軟口蓋音 (*[g]* > *[g]*) のままであった。なお単数形の WS *ġeat* *[jæat]* ‘gate’ は WGmc **[gat]* (OS, ON *gat*) > (AFB) **[gæt]* > (硬口蓋化) **[g’æt]* > (硬口蓋二重母音化) **[g’æat]* > (*[g’]* の *[j]* への変化) *[jæat]* という音過程の結果であるのに対し、これに対応する Merc *ġet* *[jet]* は WGmc **[gat]* > (AFB) **[gæt]* > (硬口蓋化) **[g’æt]* > (*[g’]* の *[j]* への変化と第 2 の前舌化) *[jet]* という音過程の結果である。従って生起順序としては復元、硬口蓋化、第 2 の前舌化、後舌ウムラウトの順であったと考えられる。

さらに硬口蓋化、第 2 の前舌化という順序を裏付けられるのが Campbell (1959 : 82) が挙げている ME *-gedere* ‘together’ ではないだろうか。これは古英語では *tōgædere*、*ætgædere* ‘together’ という形で証明されるものであり、両者は **tō/at gadurī* (OFris *tōgædere*) > (AFB) **tō/æt gædurī* > (復元) **tō/æt gadurī* > (i-ウムラウト) **tō/æt gadyrī* > *tōgædere*、*ætgædere* (OE *gador-wist* ‘companionship’、OFris *gadur* ‘together’) という音過程の結果である。そ

して Campbell は -gædere が第 2 の前舌化を経たマーシア方言形がのちに ME -gedere として現れているという事実を挙げている。すなわちその前段階としての実際のマーシア方言形であったと考えられる *-gedere は i-ウムラウトと第 2 の前舌化を経た結果であったということになり、また g が復元による a の i-ウムラウトと第 2 の前舌化による結果音 e の前位置にあっても軟口蓋音のままであったということは硬口蓋化、第 2 の前舌化という順序をさらに明確に裏付けるものであると考えられる。

11. 第 2 の前舌化と i-ウムラウト

両者の順序関係を明確にすることは容易ではないと思われる。例えば Merc festen ‘fastening’ (WS fæsten、OS fastunna) は第 2 の前舌化と i-ウムラウトの両方を経ているのであるが、*fastunnj->(AFB) *fæstunnj->(復元) *fastunnj- が i-ウムラウトにより *fæstynn、そして *fæsten となり、さらに第 2 の前舌化により festen となったという解釈と、*fastunnj- が第 2 の前舌化により *fæstunnj- となり、そしてさらに i-ウムラウトにより *fæstynn、そして festen となったという解釈の両方が可能であろう。

Campbell (1959: 109) の見方は第 2 の前舌化、i-ウムラウトという順序であり、その根拠として Campbell が挙げているのが比較級の (*aldira>) Merc ældra ‘older’ である。Campbell (1959: 63、109) はその原級である ald ‘old’ や galan ‘to sing’ を例に取り、後続の l は æ への第 2 の前舌化を阻止したとする一方で、比較級の ældra でも同様に後続の l が æ の e への第 2 の前舌化を阻止したわけではないと考える。すなわち生起順序としては *aldira>(i-ウムラウト) ældra>(第 2 の前舌化の時期を経るも ald のケースと同じく後続の l が第 2 の前舌化を阻止した結果) ældra とは見なさず、ældra において i-ウムラウトという前舌化の効力を通過させた l が ald において第 2 の前舌化を阻止した l と同じ音質であったとは考えにくいとしている。さらに言い換えれば、i-ウムラウト、第 2 の前舌化の順であったのなら、*aldira>(i-ウムラウト) ældra>(第 2 の前舌化。すなわち i-ウムラウトの効力を通過させた l が i-ウムラウトに続く第 2 の前舌化を阻止するはずはなく) **eldra となってしまうはずであるということである。

しかし Hogg (1977: 74; 1992: 141) は i-ウムラウト、第 2 の前舌化という順序を主張し、i-ウムラウトの効力を通過させた l はまた第 2 の前舌化を阻止する l、すなわち軟口蓋音 [ɮ] でもあったのであり、i-ウムラウトが [ɮ] を非軟口蓋化して第 2 の前舌化の生起につながるということはなかったとしている。すなわち ældra は *[aɮdira]>(i-ウムラウト) *[aɮdira]>(第 2 の前舌化の時期を経るも i-ウムラウト後も軟口蓋音のまま維持された [ɮ] が æ の第 2 の前舌化を阻止) *[aɮdira]>ældra [aɮdra] という音過程の結果であったということになる。

さらに i-ウムラウト、第 2 の前舌化という順序であったことを裏付ける例としてしばしば挙げられるのが bedd ‘bed’ であり、これは *baddj->(AFB) *bæddj->(i-ウムラウト) bedd>(第 2 の前舌化の時期を経るも当然 e は第 2 の前舌化の適用対象外)>bedd という音過程の結果であろう。しかし第 2 の前舌化、i-ウムラウトという順序を主張する Campbell (1959: 63、76) は、æ の第 2 の前舌化による e は Gmc e に由来する e とは同一ではなかったのであり、それが後に i-ウムラウトを受けた結果、Gmc e に由来する e と併合したと考える。これは、æ の第 2 の前舌化による e は [e] であったのであり、それがのちに i-ウムラウトを受けて [e] となったとする見方であると解釈できる。すなわち *baddj->(AFB) *bæddj->(第 2 の前舌化) *beddj->(i-ウムラウト) bedd という音過程の結果であるという見方であるが、Hogg (1977: 72-73; 1992: 139、141) は æ の第 2 の前舌化による e はあくまでも [e] であるとしており、第 2 の前舌化による e [e] が i-ウムラウトを受けると (*beddj->**biddj->) **bidd となってしまうという反論も可能であるということは認めつつも、これが第 2 の前舌化、i-ウムラウトという順序を完全に否定する根拠となるとは考えにくく、また [e] を仮定することは i-ウムラウト、第 2 の前舌化という順序を否定するため

だけの ad hoc な手段にすぎないとして、これを却下している。そして e>i の i-ウムラウトは他の母音の i-ウムラウトよりも早期の段階の現象であったと思われることから、この *beddj->**biddj- のような i-ウムラウトが古英語のこのような段階で起こり得たかどうかは疑問である。従って生起順序としてはやはり *baddj->(AFB) *bæddj->(i-ウムラウト) bedd>(第2の前舌化の時期を経るも当然 e は第2の前舌化の適用対象外)>bedd であったと考えられる。

12. i-ウムラウトと後舌ウムラウト

前者が後者に先立って起こっていたことは、L asellus>WGmc *asil>(AFB) *æsil>(i-ウムラウト) *esil>(接尾辞の変異により) *esul>esol>eosol ‘donkey’ (OS, OHG esil, Go asilus); fremu, freomo ‘benefit’ のような例が示すように、AFB による æ の i-ウムラウトと鼻音化された a の i-ウムラウトに由来する e が後舌ウムラウトにより eo となっていることから明らかである。後者は弱変化動詞 1 類で i-ウムラウトを伴う (Gmc *framjanan>) fremman ‘to further’ (OS fremmian, ON fremja) と同根であり、fremu の語根母音 e はそこから二次的に導入されたものである。この e が Gmc e に由来するものではなかったことは明らかであり、もしこの e が Gmc e に由来するものであったなら、この語は **frimu、さらに後舌ウムラウトにより **friomu となっていたはずである。なぜならば OE niman ‘to take’ (OHG neman, ON nema) が示すように、古英語では Gmc e は単一の鼻音 m の前では、しかも次音節の母音の音質とは無関係にいったんは i となり、のちにこの語はさらに後舌ウムラウトにより nioman, nioma となっているからである。

13. 西ゲルマン語の子音重複、割れ、後退

WGmc a を反映する母音の i-ウムラウトの結果音についての注目すべき事項としてさらに、Gmc *-llj- を継承する *-llj- の前でのケースと、後続の j によって引き起こされた西ゲルマン語の子音重複に由来する (Gmc *-lj->) *-llj- の前でのケースがある。前者のケースでは、WS (*fiellan>) fyllan とそのアングリア方言形の Merc gēfællan ‘to make fall, to fell’ (OS bifellian, ON fella) を例に取ると、WS fyllan は Gmc *falljanan>WGmc *falljan>(AFB) *fælljan>(割れ) WS *fealljan>(i-ウムラウト) *fiellan>fyllan、そして Merc gēfællan は Gmc *falljanan>WGmc *falljan>(AFB) *fælljan>(後退) *falljan>(i-ウムラウト) gēfællan という音過程の結果である。これに対し、後者の子音重複に由来する *-llj- の前でのケースでは、予想に反し割れも後退も起こった形跡は見られず、Gmc *taljanan>(子音重複) WGmc *talljan>(AFB) *tælljan>(i-ウムラウト) tellan ‘to tell’ (OS tellian, ON telja)、Gmc *haljō ‘hell’>(子音重複) WGmc *hallju>(AFB) *hællju>(i-ウムラウト) hell (OS hellia, Go halja) のように AFB による æ が i-ウムラウトにより e となるという簡潔な音過程しか反映されていない。本来であれば ‘to tell’ は Gmc *taljanan>(子音重複) WGmc *talljan>(AFB) *tælljan、そしてウェストサクソン方言では割れと i-ウムラウトにより **tiellan、アングリア方言であれば後退と i-ウムラウトにより **tællan が、そして ‘hell’ についても同様に WS **hiell、Angl **hæll が予想されるであろう。なお tellan については、j が子音重複に先立ち消失していた直説法 2、3 人称単数現在 (*taljis、*taljip>*talis、*talip>) tel(e)s、tel(e)p との、あるいは末尾母音の早期の消失により末尾に位置するようになった接辞 j が子音重複に先立ち i に母音化し、さらに e に弱化した命令法単数 (*talj>*tali>*tæli>) tele との混交により、**tiellan、**tællan が tellan に類推的に置きかえられたという可能性は否定できないかもしれない。しかし jō- 語幹名詞 hell では明らかに西ゲルマン祖語の段階で単数と複数のすべての変化形で子音重複が起こり、その変化表において語根母音の交替も、またそれに起因するであろう混交も起こり得なかった。すなわち語根母音としてはもともと割れも後退も介することなく一律に AFB の結果音 æ の i-ウムラウトによる e を有してい

たのであり、hell における e は Gmc *-lj->WGmc *-llj- の前位置での WGmc a の規則的な発達の結果であったと考えられるのである。

それでは tellan、hell の前段階である *tælljan、*hællju が割れ、後退を伴う WS **tiellan、**hiell、Angl **tællan、**hæll、とはなっていないのはなぜであろうか。子音重複が起こったのが割れと後退の後であったのなら、tellan、hell は規則的な発達であると言えるが、後続の j による西ゲルマン語の子音重複は西ゲルマン諸語に共通の現象であり、それが起こったのは西ゲルマン祖語の段階であったと考えられる。

Hogg (1974; 1992: 85)、Ringe & Taylor (2014: 184) によると、Gmc *-lj- の段階で l が後続の j の影響により硬口蓋化の効果を有していたのであり、また WGmc *-llj- となったのちも硬口蓋化の効果を引き継いでいたため、この ll の前では前母音の後舌化と考えられる割れも後退も起こらなかったのだという。Hogg は割れを起こした ll の音価を子音重複に由来するものと区別して [H] と表記しており、Ringe & Taylor (2014: 185) は子音重複に由来し割れも後退も起こさない ll は硬口蓋化された重子音であったとして、その音価を [lʰ] と表記している。

しかし子音重複と割れの関係について別の見方を提案しているのが Barrack (1989: 292-294) である。Barrack は割れの有無の前段階として tellan には *tælljan を、他方 *fiellan にはこれがゲルマン祖語の重語根形に由来することから Sievers の法則の結果を維持した *fælljan という形を推定している。すなわち古英語では j は i よりも硬口蓋化を引き起こす度合いが強かったため、(*-lj->) *-llj- の前では後舌化とも言える割れが起こらなかったのに対し、Sievers の法則の結果を維持した *-llij- の前では i の硬口蓋化の影響よりも -ll- の後舌化の影響力がまさっていたために割れが起こったのだという。さらに言い換えれば、Hogg は [-llj-] (割れ無し)、[-Hj-] (割れ有り) としているのに対し、Barrack は [-lʰj-] (割れ無し)、[-llij-] (割れ有り) としていると言えるであろう。

また spearwa ‘sparrow’ (Go sparwa) のように *-rw- の前では割れが起こっているのに対し、*-rj- の前では例えば erian ‘to plow’ (Go arjan)、(WGmc *harjas>) herges ‘army’ (属格単数) (OS、OHG heries、Go harjis) が示すとおり割れは見られない、すなわち割れを経た **earjan、**hearjæs>WS **ierian、**hieries とはなっていないのも Hogg (1974)、Barrack が主張するように、*-lj- のケースと同様の理由によるものと思われる。そして Hogg (1974) は割れを引き起こす r は l のケースと同じく軟口蓋音であったとしており、この r の音価を [r] と表記している。

14. i-ウムラウトと同じ条件下での早期の e>i と eu>iu、鼻音+子音の前での早期の e>i、割れ、後退

前記で扱った明らかに古英語期のもとのされる i-ウムラウトとしてはほとんど扱われることはないものの、同様の变化であった注目すべきものとして e>i、eu>iu があり、これらについては前回 (1) の森 (2020) において i の割れに由来する io の i-ウムラウト、i の後退に由来する u の i-ウムラウト、iu に由来する io の i-ウムラウトの箇所ですでに触れた。そして i-ウムラウトではないが、同じ結果をもたらす鼻音+子音の前での e の i への上げという変化は e>i、eu>iu と同時期のものとする見方が一般的である：OE midd ‘middle’ (OS middi、OHG mitti、ON miðr、Go midjis、L medius)；OE is ‘is’ (OS、OHG、Go ist、L est、Gk estí、Lith ėsti)；IE *bheudh->Gmc *beuð->*biudip>*biudip>*biodip>Kt bebīot、WS bebīett ‘(s)he commands’ (OS bibiudid、OHG biutit、Go anabiudip、Gk peúthō)；OE wind ‘wind’ (OS wind、OHG wint、Go winds、ON vindr、L ventus)。

e>i、eu>iu はゲルマン諸語において非常に規則的に起こっていることから、これらはゲルマン祖語の段階で起こったとする見方が多数派であるが、ゴート語には次音節の要素に起因するウムラウトのような音変化は起こっていないと断定できるであろう。すなわちゴート語では e>i は後続子音が r、h、hv 以外であれば次音節の要素とは無関係に起こっていること (Go itan、OE etan ‘to eat’；Go hilpan、OE helpan ‘to help’)、そして r、h、hv の前では次音節の要素に関係なく e>i は起こっていないことから (Go bairip、OE birep、OS birid、OHG birit ‘(s)he carries’；

Go sailviþ、OE siehþ、-siohð、OS gisihit、OHG sihit ‘(s)he sees’、Cercignani (1980) が主張するように、e>i の i-ウムラウトは実はゴート語を除く北・西ゲルマン語に特有の現象であったと考えられるのである。そしてゴート語では eu>iu もまた同様に次音節の要素とは無関係に起こっている (IE *bheudh->Gmc *beuðanan>Go anabiudan ‘to command, to offer’ (OE bēodan、OS biodan、OHG biotan)。従って Go midjis、ist、anabiudip の語根母音 i、iu は e>i、eu>iu の i-ウムラウトとは無関係な現象であったと考えられる。

さらに Cercignani は e>i の i-ウムラウトのみならず鼻音+子音の前での e>i の上げもまた個々の北・西ゲルマン語への分裂後に起こったとさえ主張している (また Cercignani は従来同じくゲルマン祖語の段階で起こったとされてきたが、実際には北・西ゲルマン諸語でしか確認できず、しかも e>i の i-ウムラウトほど一貫しては見られない u>o の a-ウムラウトについても当然ながら同様の主張をしている)。Cercignani のこの主張を是とするなら、前回取り上げた古英語期の他の i-ウムラウト、すなわち単母音では AFB による æ と後母音、二重母音 ea、ēa、io、īo の i-ウムラウトと同様この e>i の i-ウムラウトもまた古英語期に起こったということになる。であれば古英語では e>i の i-ウムラウトが他のすべての i-ウムラウトも含め冒頭の一覧に挙げた古英語の数ある音変化とはどのような順序関係にあったのであろうか。残念ながらこの点について Cercignani は具体的には何も述べてはいないが、e>i の i-ウムラウトが (そして恐らく eu>iu の i-ウムラウトもまた) 少なくとも他の i-ウムラウトとは同時ではなく、より早期の現象であったことは間違いないものと思われるのであり、そのことをより具体的に確認できるのが e>i の i-ウムラウトと割れ、後退との関係ではないだろうか。まず割れに由来する io は次音節に i、j を有していたケースがほとんどであり、io の前段階は i であり、さらにその前段階はたいてい Gmc e であった。このことは例えば上記の siehþ、-siohð、そして Gmc *wersiz>(i-ウムラウト) *wirsi>(割れ) *wiorsi>(i-ウムラウト) WS wiers ‘worse’ (OS、OHG wirs、Go wairs) から明らかであろう。また e>i の i-ウムラウトは後退に先立って起こっていたと考えられるのであり、このことを明確に裏付けられる例は WS wiers のアングリア方言での対応形 wurs であり、これは Gmc *wersiz>(i-ウムラウト) *wirsi>(後退) *wursi>(i-ウムラウト) wurs という音過程の結果である。さらに eu>iu の i-ウムラウトについては、これが io>ie の i-ウムラウトの前段階であったことは明らかであろう。

また鼻音+子音の前での e>i の上げについては、これが割れよりもはるかに早期に起こっていたことは IE *H₁ lengʷh->Gmc *lenh^wtjanan>*linhtjanan>*lihtjan>(割れ) *liohtjan>(i-ウムラウト) WS *liehtan>lyhtan ‘to alleviate’ (Lith leņgvas ‘light in weight’) という例からも明らかである。しかもこの e>i の上げはゴート語も含めすべてのゲルマン諸語に完全に共通していることから、e>i の i-ウムラウトよりもさらに古い現象であった可能性が高く、ゲルマン祖語で起こっていたと見なしでもよいものかもしれない。

e>i の i-ウムラウトの例としてさらに注目しておきたいのは Gmc *[gef-ti-] ‘gift’ (OE gift、OHG gift、OFris jeft、ON gipt、Go fragifts) である。これは強変化動詞 5 類の Gmc *[gebanan] ‘to give’ (>OE (WS) giefan、OS geban、OHG geban、OFris jeva、ON gefa、Go giban) と同根であり、OE gift、OHG gift、ON gipt の語根母音 i は接辞 *-ti- の i による e>i の i-ウムラウトの結果であることは明らかである。古フリジア語の場合も jeft ではなく **jift となるのが本来の発達であったはずであるが、そうっていないのは動詞形 jeva の影響によるものであろう。

強変化動詞 5 類の直説法 2、3 人称単数現在では接辞が *-ist、*-ip であったため、不定詞において語根母音 (IE e >) Gmc e が無変化のまま継承された例えば OE cwepan : (*cwipist >) cwist、(*cwipip >) cwip では e>i の i-ウムラウトがはっきりと確認できる。従って giefan の直説法 2、3 人称単数現在についても Brunner (1965³ : 63)、Ringe & Taylor (2014 : 351) の見方どおり、まさに実在した gifst、gifp が本来の発達形と言えるはずである。しかも e>i の i-ウムラウトが祖語の段階で起こったという前提に立てば、これは当然の結果でもある。他方、e>i の i-ウム

ラウトを古英語期の変化としてとらえた場合でも、これが前述のように割れと後退に先立って起こっていたという前提に立てば、同時に割れと後退は硬口蓋二重母音化 (WGmc *[geban]>giefan) に先立って起こっていたことにもなることから、同じく *ġifst*、*ġifp* が本来の発達形であることを見出すことができる。逆に *e>i* の *i*-ウムラウトが硬口蓋二重母音化の後の古英語期の他の *i*-ウムラウト、すなわち単母音では AFB による *æ* と後母音、二重母音 *ea*、*ēa*、*io*、*īo* の *i*-ウムラウトと同時期であったのなら、*[gef-ti-] ‘gift’ はまず **ġifti* ではなく ***ġiefti* となってしまうたであろう。そしてこの場合、***ġiefti* からさらに二重母音 *ie>i* の *i*-ウムラウトが働いて *ġift* となったというのであろうか。しかし *ie>i* などという *i*-ウムラウトを主張する意見は現に皆無であり、また仮に二重母音 *ie* が古英語の *i*-ウムラウト期に存在していたとしてもその適用の対象外であったかもしれない。他方、***ġiefti* は ***ġieft* となり、さらに *i*-ウムラウトとはまったく別の *ie>i*、*y* という後期のウェストサクソン方言独自の変化により *ġiefan* がのちに *ġifan*、*ġyfan* となったのと同様、***ġieft* は *ġift*、**ġyft* となり、文献上には *ġift* が残ったという可能性も完全には否定できないかもしれないが、こうした見方を主張する意見もまた見当たらないようである。従って *e>i* の *i*-ウムラウトは、そして同様に *eu>iu* の *i*-ウムラウトも、割れと *i>u* の後退はもちろん硬口蓋二重母音化よりも早く起こっていたものと考えられる。

15. 単一の *m* の前での *e>i* と後舌ウムラウト

前者が後者に先立って起こったことは、Kt、Merc *nioman*、Nbr *nioma* ‘to take’ (OS *niman*、OHG *neman*) が示すとおり、WGmc *e* が単一の *m* の前での上げを受けた結果音 *i* が *io* への後舌ウムラウトを受けていることから明らかである。

16. 滑化と後舌ウムラウト

冒頭でも示したように、Campbell (1959: 93-97) は後舌ウムラウト、滑化という生起順序を主張し、アングリヤ方言では後舌ウムラウトによる二重母音化がふつう軟口蓋子音の前では見られないのは後舌ウムラウトがこれらの軟口蓋子音の前では起こらなかったからではなく、後舌ウムラウトは軟口蓋子音の前でも起こったが、割れによる二重母音と同様のちに滑化による単母音化を受けたため、後舌ウムラウトによる結果が消去されたためとしている。Merc *dægas* ‘days’ を例に取れば、このプロセスは *dagas*>(第2の前舌化) **dægas*>(後舌ウムラウト) **deagas*>(滑化) *dægas* のように示すことができる。しかし Ball & Stiles (1983: 7) は Campbell の見解には懐疑的であり、その根拠としてアングリヤ方言の写本と碑文を見る限り、滑化と後舌ウムラウトの両方が見られるケースと滑化は見られるが後舌ウムラウトは見られないケースはある一方で、滑化は見られないが後舌ウムラウトは見られるケースはないという事実を挙げている。そして Hogg (1992: 152)、Ringe & Taylor (2014: 320) もこの Ball & Stiles の主張を支持している。

17. *ġeolu*、*meolu* の *eo* は割れか、後舌ウムラウトか？

Campbell (1959: 93) は (*[gelu]>) WS *ġeolu* ‘yellow’ (OS *gelu*、OHG *gelo* ‘yellow’、L *helvos* ‘bay (horse)’) における *eo* は硬口蓋二重母音化による *ie* が後舌ウムラウトを受けた結果であるとしているのに対し、Ball & Stiles (1983: 15) はその反例として (*[gebu]>) WS *ġiefu* ‘gift’ (OFris *jeve*、ON *gjof*) を挙げている。硬口蓋二重母音化が見られない他の方言における対応形は Merc *ġeofu*、Nbr *ġeafa*、(複数形) *ġeofa*、Kt (複数形) *ġiofa* のようにもちろん後舌ウムラウトの結果を規則的に反映している一方で、ウェストサクソン方言でも *ġiefu* だけでなく、他の方言と同じくなぜか後舌ウムラウトを反映する *ġeofu* という形も見られる。しかし WS *ġiefu* における *i* が *g* の硬口

蓋化を示す符号でしかなかった、すなわち *giefu* の音価が [jiyvu] ではなく他の方言形の場合と同じく後舌ウムラウトへの入力に等しい [jevu] であったか（そしてこの場合の [jevu] は確かに後舌ウムラウトへの入力ではあり得たものの、後舌ウムラウトの生起が必ずしも徹底していなかったことに起因するものということになる）、あるいは他の方言からの借用であったかの、いずれかでない限り後舌ウムラウトを反映する WS *geofu* という形は本来有り得ないものであったと考えられる。そして Ball & Stiles (1983: 15-16) は ‘yellow’ がウェストサクソン方言では **gieclu* ではなく *geolu* となっているのは後舌ウムラウトの結果ではなく、*wa-*、*wō-* 語幹であったことによる割れの結果であったとしており、割れは硬口蓋化に先立って起こったことが明らかである以上、この Ball & Stiles の主張は当然正しい。確かに本来の発達としては、Gmc **[gelwaz]*、**[gelwan]*、**[gelwō]*（それぞれ強変化男性・中性・女性の主格単数）からまず得られる形はいずれも **gelu*、そしてウェストサクソン方言ではこれは後舌ウムラウトに先立つ硬口蓋二重母音化により *giefu* と同じく *ie* を示す **gieclu* となるのが本来の発達であると思われるのであるが、実際には *geolu* となっているのは Ball & Stiles (1983: 16-17) が主張するように、弱変化形も含め *lw* の後位置の母音が維持されていたために硬口蓋二重母音化に先立って割れを起こした *geolw-* 形への類推に起因するものであったと考えられる。

他方、硬口蓋二重母音化のないマーシア方言では主格単数形としては *geolu* のほか、割れない本来の形でもあり、さらに後舌ウムラウトの生起が不徹底であったために *e* を無変化のまま維持した *gelu* も見られる。Hogg (1992: 88-89, 152, 159) はこの *geolu* についても *eo* はウェストサクソン方言の場合と同じく *geolw-* 形への類推に起因するとしているが、のちに *gelu* が後舌ウムラウトにより *geolu* となった結果である可能性も否定できないであろう。そして同じことは Nbr *geolu* についても言えるであろう。

さらに *lw* の前での同じ交替を示す例として名詞の (Gmc **melwa->*) *me(o)lu*、*me(o)lw-* ‘meal’ (OS, OHG *melo*) を挙げてよいであろう。そしてさらに同じ交替は (**terw->*) *te(o)ru* ‘tar’、(**smerw->*) *sme(o)ru* ‘fat’ のように *rw* の前に WGmc *e* を有するケースでも見られる。すなわち主格対格単数形 *melu*、*teru*、*smeru* はあまり規則的ではなかった後舌ウムラウトを免れた発達形であり、*meolu*、*teoru*、*smeoru* は主格対格単数以外の *eo* への割れを本来引き起こした *lw-*、*rw-* 形の影響による場合と、後舌ウムラウトによる場合の両方が考えられる。また *melw-* のような *lw-* 形でありながら割れを示さない形は後舌ウムラウトを免れた主格対格単数形の影響によるものであろう。

18. 逆方向の結果をもたらす割れと滑化

割れという二重母音化 ($\text{æ} > \text{ea}$ 、 $\text{æ} > \text{ēa}$ 、 $\text{e} > \text{eo}$ 、 $\text{ē} > \text{ēo}$ 、 $\text{i} > \text{io}$ 、 $\text{i} > \text{iō}$) は後続の軟口蓋性を帯びた子音または子音群の影響による前母音の後舌化のようなものと考えられるのであるが、のちにアングリヤ方言ではまさにその割れに関わった子音要素のうち *c*、*g*、*h* が、二重母音（割れに起因するものもそうでないものも）の後舌第2要素をのちに消去した。これは古英語における音変化としてはかなり後期に位置づけられる滑化 (smoothing) と呼ばれる単母音化 ($\text{ea} > \text{æ}$ 、 $\text{ēa} > \text{æ}$ 、 $\text{eo} > \text{e}$ 、 $\text{ēo} > \text{ē}$ 、 $\text{io} > \text{i}$ 、 $\text{iō} > \text{i}$) であり、割れとは逆の前舌化とも言える。一見同じであったはずの後続子音が割れとのちの滑化という2つの相反する現象を引き起こしたことになる。この点について Hogg (1992: 143-144) は次のような解釈を試みており、Smith (2009: 102-103) もそれを支持している。例えば *weorc* ‘work’ を例にとると、割れによって生じた二重母音の後舌第2要素がのちに [ə] に弱化したこと ([*weork*] > [*weork*]) により後続の軟口蓋子音 [k] が逆に先行の二重母音の第1要素であった前母音 *e* から硬口蓋化的な影響を受けやすくなり (> [*weorkʰ*])、最終的にこの [kʰ] の前舌的な影響により先行の [eə] の前舌音的ではない第2要素 [ə] が排除され、かつての二重母音の第1要素であった前舌音 [e] のみを残す滑化 (> *werc*) につながったのだという。

19. 結びにかえて

Campbell が示した 10 項目の音変化とその生起順序についての以上の論考から、その生起順序については Campbell 以降の他の学者の見解も考慮に入れ、敢えて若干の補足と見直しを加えた上で次のような提案も可能ではないかと思われる。

1. WGmc a, ā は鼻音の前で鼻音化された; 2. 鼻音の前以外では WGmc ā はいったん POE æ となり、Sievers の法則に起因する (j>) ij のケースを含め高位前舌母音 i が後続していなかった w の前では、あるいは高位前舌母音 i、半母音 j (これは Sievers の法則が働かなくなり、その結果が反映されなくなった段階としてとらえたもの) が後続していなかった w の前では全方言で ā となり、それ以外の場合は WS æ、Angl ē となった; 3. WGmc ai>ā; 4. WGmc a の æ への前舌化 (AFB); 5. 割れと後退。両者は同時期に起こったと思われる; 6. æ, æ>a、ā の復元; 7. 軟口蓋子音の硬口蓋化; 8. 硬口蓋二重母音化 (なお、場合によっては次の 9. の i-ウムラウト後にも起こったケースがある); 9. e>i, eu>iu を除く明らかに古英語期独自の i-ウムラウト; 10. 第 2 の前舌化; 11. 有声音間での h の消失とそれに伴う母音縮約と代償的長音化; 12. 滑化; 13. 後舌ウムラウト; 14. 有声音間での h の消失とそれに伴う母音縮約と代償的長音化 (11. とは少し異なる条件下でのもの)。

11、12、14 の順序関係について言えば、例えば *feolhan>Merc ætfeolan ‘to cling’ のように有声音間での h の消失に伴う母音縮約と代償的長音化、滑化の順で起こったと思われるケースと、仮定法現在 1 人称単数 *feolhæ>Merc *felhæ>fēle のようにその逆の順序で起こったと思われるケースがあることから、有声音間の h の消失という同じ現象であっても h に後続していた母音が前母音と後母音のいずれであったかによってその生起が滑化を挟んで前後していたものと考えられる。

また、e>i, eu>iu の i-ウムラウト、鼻音+子音の前での e>i, 単一の m の前での e>i, u>o の a-ウムラウトについては生起順序としては正確に上記のリストのどこか早期の段階に位置づけられるのか、あるいはどこかもっと以前の段階のものであったのかは確定し難いが、これらのうち定説どおりゲルマン祖語の段階で起こった可能性が最も高いのはゴート語を含むすべてのゲルマン語において完全に規則的に見られる鼻音+子音の前での e>i なのかもしれない。そして後続の j による子音重複はもちろん上記のリストよりもずっと以前の西ゲルマン祖語の段階に位置づけられるであろう。

参考文献

- Ball, C. J. E. & P. V. Stiles. 1983. “The derivation of Old English *gēolu* ‘yellow’ and the relative chronology of smothing and back-mutation.” *Anglia* 101, 5-28.
- Barrack, C. M. 1989. “Keyser, Kiparsky, O’Neil and Postal versus Sievers.” *Lingua* 77, 223-296.
- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cercignani, F. 1980. “Early ‘umlaut’ phenomena in the Germanic languages.” *Language* 56, 126-136.
- Colman, F. 1985. “Old English *ie*: quid est?” *Lingua* 67, 1-23.
- Fulk, R. D. 1998. “The chronology of Anglo-Frisian sound changes.” *ABäG* 49, 139-154.
- Hogg, R. M. 1974. “Further remarks on breaking and gemination.” *AL* 5, 47-52.
- Hogg, R. M. 1977. “The chronology and status of second fronting.” *AL* 8, 70-81.
- Hogg, R. M. 1992. *A grammar of Old English*. Vol. I: *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.

- Kroonen, G. 2013. *Etymological dictionary of Proto-Germanic*. Leiden-Boston: Brill.
- Lass, R. 1994. *Old English: a historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森 基雄. 2019. 「古英語と古フリジア語の音変化の類似点と相違点について」『奈良学園大学紀要』第11集, 143-157.
- 森 基雄. 2020. 「古英語の音変化に関する一考察(1)」『奈良学園大学紀要』第13集, 115-128.
- Ringe, D. & A. Taylor. 2014. *The development of Old English: a linguistic history of English*. Vol. II. Oxford: Oxford University Press.
- Smith, J.J. 2009. *Sound change and the history of English*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E.M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.